

「人権教育研究指定校事業」事業実施報告書

都道府県・指定都市名 (新潟県)

1. 調査研究名、テーマ

(1) 研究調査名

違いやよさを認め、思いやりのある言動がとれる子の育成

(2) 調査研究のテーマ

気づき、考え、行動できるために、豊かな人権感覚、正しい知識や判断力、実践力を身に付ける教育活動の工夫

(3) 調査研究のテーマを設定した目的

① 学校教育目標から

北辰小学校では教育目標を「見つめて学ぶ もとめて生きる 笑顔をつなぐ」、重点目標を「違いやよさを認め、かかわり合って伸びる子の育成」としている。このような児童を育成するには、すべての教育活動において、社会性を育成しながら望ましい人間関係を構築し、互いに認め合い、思いやりをもって互いに高め合う取組を、組織的・計画的・継続的に行うことが重要である。

② 児童の実態から

北辰小学校は、児童数約 300 人の中規模校である。北辰小学校の児童は自然と元気に挨拶を交わしたり、様々な活動に一生懸命に取り組んだりするなど、素直な児童が多い。また、授業においては、教師の話をよく聞き、指示に対して素直に取り組む。その一方で、限られた人間関係の中で些細なトラブルを繰り返しながらも自ら問題を改善しようとせずにいる児童もいる。また、表現が稚拙で、伝えることが苦手な児童もいる。

このような実態から、北辰小学校では、互いの違いを認め、相手への思いやりをもって接し、高め合う関係づくりが求められる。

以上のことから、本校では人権教育指定校事業の調査研究名を「違いやよさを認め、思いやりのある言動がとれる子の育成」を設定することとした。

2. 調査研究の体制・内容等

(1) 研究指定校の概要

学校名	南魚沼市立北辰小学校
これまでの研究 指定等の状況	令和 2 年度 文部科学省の人権教育研究推進事業の指定を受ける
学級数	16 学級 (うち特別支援学級: 4 学級)
児童生徒数	全児童数: 282 人 (令和 4 年 2 月 1 日現在)
URL	http://www.minamiuonuma.ed.jp/~muikamachi

(2) 指定理由

本県では「新潟県人権教育基本方針」に基づいて人権教育を推進している。小中学校では年間指導計画を作成し、正しい理解、豊かな人権感覚を身に付けるための実践に計画的に取り組んでいる。しかし、本県のいじめの認知件数の推移などを見る限り、人権教育の取組の成果が身近な生活場面で発揮されるまでにはいたっていない。

一方、南魚沼市では少子化の進行により子ども同士の関わりが急速に希薄化しており、児童生徒の人間関係上の諸問題を解決する力が課題の一つとされている。こうした地域的課題を有する北辰小学校では、児童の社会性を育成しながら、望ましい人間関係を構築するために、全校体制で取組を進めている。

以上のように、本県の人権教育を推進する上での課題及び指導の重点は、南魚沼市並びに北辰小学校が抱えるものと重なるところが多い。したがって、南魚沼市立北辰小学校が本研究指定事業に取り組み、その成果を県内で広く共有することは、本県における人権教育の推進に大

きく寄与するものと見込まれる。

3. 取り組んだ人権課題について

(1) 人権課題「子供」について取り組んだこと

○全校体制で自他の命を大切にすること意識を醸成すると同時に、様々な違いに関わらず、一人一人がかげがえのない存在であることの理解を促し、いじめの未然防止を図った。

- ・縦割り班清掃や縦割り班を活用した異学年交流の場の設定
- ・「生きる」シリーズを活用した人権教育、同和教育の推進
- ・障害者児童理解の職員研修
- ・人権教育、同和教育研修会
- ・自他の命を大切にすること意識を育む道徳授業
- ・一人一人の子供の考えを大切にしたい普段の授業実践

(2) 取り組んだ人権課題（該当するものに○印。複数選択可）

①女性	
②高齢者	
③障害者	○
④同和問題	○
⑤アイヌの人々	
⑥外国人	
⑦-1 HIV 感染者等	
⑦-2 ハンセン病患者等	
⑧刑を終えて出所した人	
⑨犯罪被害者等	
⑩インターネットによる人権侵害	○
⑪北朝鮮当局による拉致問題等	
⑫性的指向、性自認	
⑬その他（ ）	

4. 調査研究の内容等

(1) 調査研究の内容

「違いやよさを認め、思いやりのある言動がとれる子の育成」のために、「新潟県人権教育基本方針実践のための『教職員研修の手引き』」（新潟県教育委員会）で示された人権教育を通じて、育てたい資質・能力「①知識的側面、②価値的・態度的側面、③技能的側面」を北辰小学校では、次の3つの柱に捉え直し、その育成を図ることとした。

- I 「心を創る」 …豊かな人権感覚の育成
- II 「学びを創る」 …正しい認識や判断力の育成
- III 「つながりを創る」 …社会性や実践力の育成

全職員が学年部ごとに分かれて、当校の「子供のよさ」をもとに、育成していきたい子供の姿「違いを受け入れて、実践できる子供」を目指すことを共通理解して授業実践に取り組んだ。

(2) 実施方法

①「心を創る」：豊かな人権感覚の育成に向けて

ア. 人権感覚の育成に向けた「人権教育、同和教育」の授業実践を積み重ねる。

イ. 教職員の人権感覚を高めるための研修機会を設ける。

○9月6日（月）に十日町みなと法律事務所の弁護士、関雅夫様を講師として招聘し、「いじめ防止対策推進法の要点」について職員研修を行った。具体的な法律から、いじめの定義や学校としての義務、具体的な重大事案について学ぶことができた。

○11月22日（月）に部落解放同盟新潟県連合会執行委員長の長谷川均様を講師として招聘し「人権教育、同和教育研修会」を行い、講話をいただいた。

ウ. 全校体制で心に響く道徳の授業づくりに取り組む

○12月3日（金）に、全学級において人権教育と関連の深い道徳科授業を授業参観日に

合わせて公開した。

エ. パラスポーツプログラムを通じた障害者理解

○10月8日（金）に、4～6年生を対象に、「あすチャレ！スクール」を行った。講師としてパラリンピック男子車いすバスケットボール元日本代表の神保康広様を講師として招き、児童・職員による車いすバスケットボール体験や講師の講話を行った。そして、「他者のことを自分ごととして考える心」「障がいとは何か」「可能性に挑戦する勇気」「夢や目標を持つ力」など「4つの学び」を深めることができた。

②「学びを創る」：正しい知識や判断力の育成に向けて

オ. 一人一人が大切にされ、お互いに認め合う集団づくりのスキルを確立する。

○違いやよさを認め合う授業実践を全職員で共通理解して、「主体的・対話的で深い学びの実現」のため、一人一人の個性や多様性を認め合う授業を推進した。個別最適な学びと協働的な学びの具現を図った一人一実践の授業公開を行った。

カ. UDLの視点から一人一人に配慮した学習指導についてのスキルを高める。

キ. 教職員の人権感覚を高めるための研修機会を設ける。

○8月23日（月）に長岡豊学校小出分教室の高橋登様を講師として招聘し、「難聴児童への指導の仕方」をテーマにして職員研修を行った。難聴児童の困り感について、普段の生活で注意すること、指導の仕方について学ぶことができた。

③「つながりを創る」：社会性や実践力の育成に向けて

ク. 児童会活動で異学年との交流を図り、自尊感情を育み、社会性や実践力の向上を図る。

○子供が計画した異学年交流を図れるように委員会を見直し、計画的に異学年交流できるように設定した。

ケ. 運動会、縦割り班活動や学級での集団遊びを通した集団参加能力の向上を図る。

コ. 生活科における栽培飼育活動を通して、共感性を育む。

（3）検証・評価・改善・普及

＜全体分析1「教職員評価」＞ アンケート実施時期：7月、12月

1学期と2学期の学級担任を対象とした職員アンケートでは、授業実践や研究会、講演会などの取組を推進してきた結果が日々の授業実践の推進や職員の意識向上という形で表れていた。しかし、普段の授業づくりを通して、一人一人の個性や多様性を認めてよりよい人間関係を育てていくこと、UDLの環境整備を継続していくこと、生命尊重の心の育成など、普段の学校生活での人権教育を継続してバランスよく指導する必要がある。

＜全体分析2「児童評価」＞ アンケート実施時期：7月、12月

項目	7月	12月
道徳の授業などで、今までの自分を振り返り、これからの自分を考えることができた	90.1%	94.3%
自分と違う意見を大切にしたり、よりよいものにしようと考えを出したりして活動することができた	90.4%	92.8%
目的をもって友達とかかわり、考えを出し合うことができた	86.5%	90.7%

総じて、自身の行動や学習状況について肯定的に捉えている児童が大半であった。本調査研究を通じて、自分自身を見つめ、これからの自分の姿につなげていこうとする姿、人と違う意見や考えを大切にしたり、考えを変容させていくことを認めたりする姿、相手のことを考えて他者を意識しながら、よりよいものを作り出していこうとする姿につながっていったと考えられる。

＜部分分析「調査研究における評価」＞

I. 人権感覚育成に向けた「人権教育、同和教育の学習」の授業実践（上記ア）

2年2組 単元：「たかしさんの黄色いズボン」（生きるⅠ）

（19名） 目標： つらい思いをしている友達の気持ちを考えながら、からかい・仲間外しなどのいじめに対して勇気をもって解決していこうとする態度を育てる。

2時間の授業構想で本単元を実践した。1次では、自分から行動を起こすと振り返りを記述した子供が11名であったが、2次では、19名全員の子供たちが、勇気をもって自分から行動を起こすに変容していた。

6年1組 単元：「切られた心」（生きるⅢ）

（25名） 目標： 「いじめられる側にも原因がある」という考え方のおかしさに気づき、

自分の行動を見つめ直すことができる。

児童A児は自他のことを「〇〇なタイプ」と一面的にとらえ、人を決めつけて見てしまう傾向があった。しかし、本時では、授業中に何度も発言したり、他者の発言に何度も「でも…」とつぶやいたりしながら、自分の考えを再構成している姿が見られた。以下、A児の振り返りである。

私は、あまり相手の立場になって考えることが少ないけど、今回の授業で相手の立場になって考えることの大切さが改めて分かりました。だからいじめを生みにくくするために大切なことは、相手のことを考えて行動したり、言ったりすることだと思います。気付いていないうちに、相手の嫌なことを言っているかもしれないから、気を付けたいと思いました。

後日、協議会で話題になった「加害者側に問題があること」について、子供に考えさせ、出てきたキーワードをもとに、「全校いじめゼロ集会」の学級スローガンとして取り組むことができた。

Ⅱ. パラスポーツプログラムを通じた障害者理解（上記エ）

「あすチャレ！スクール」では障がい者を理由にしてチャレンジすることをあきらめず、やりたいことに挑戦する勇気の大切さを振り返りで書いた児童が多くいた。以下は普段は発言することが少ないB児が書いた振り返りである。

私が学んだことは「自分がやりたいことは挑戦する」ということです。私は挑戦したいことがあっても恥ずかしい、笑われると思っていたけれど、神保さんから教えてもらった「チャレンジすること」を聞いて、ぜひやってみたいと思いました。自分にとってのチャレンジは、きちんと手をあげて答えることです。

授業後の感想発表では、進んで発言することが少ない児童も、積極的に感想を話す姿があった。困難を乗り越え夢に向かってチャレンジする神保さんの姿が、児童の心に残り、失敗を恐れずやってみようという気持ちの高まりであったと考える。

Ⅲ. UDLの視点からの学習の指導スキルの向上（上記カ）

今年度は、昨年度課題として挙げた教室環境について「北辰小学校UDLチェックリスト」を作成し、学級担任・級外職員を対象に調査を行った。担任はチェックリストを参考にして教室前面の掲示物を簡素にしたり1日の予定を掲示したりするなど、教室の環境作りに取り組んだ。さらにUDLの視点から、学習課題の「◎」やまとめなどの掲示物を全校で統一したり、全学級で目標とする子供の姿を可視化したりと、全校で取り組んだことが増えた。また、全校で「聞く力」を高めることに力を入れ、話す人と聞く人の目線や姿勢を学級の実態に応じて評価し、価値付けることで、子供たちが落ち着いて学習に取り組もうとする意識を高めることができた。課題として「授業1時間の予定を明記すること」が挙げられた。今後は、児童が1時間の学習活動を見通すことで全員が主体的に学習できるように支援していく。

Ⅳ. 児童会活動で異学年との交流（上記ク）

縦割り班活動が充実して、子供同士のふれあいが増えたことで、互いを思いやった言動ができつつあったり、自尊感情を育みつつあったりしている。委員会活動では、異学年交流を取り入れたイベントを企画することが増え、子供が計画して、縦割り班を活用して児童会活動に取り組むことが増えた。これにより社会性や実践力の向上を図ることができた。

<普及>

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、授業研究協議会の参会者を郡市内の職員に限定するなど、当校の人権教育推進事業について広く普及するということまでは至らなかった。しかし、学校便りや学年便りなどを活用して、子供の姿をもとに人権教育推進事業について伝えるようにしてきた。また、学校評価を通じて、子供の意識の変化の向上の様子を家庭へ伝えた。今後、本研究の成果について、具体的な授業実践例や便り等の成果物などを、県の教育支援システムを通じて、広く県内へ発信していく。

<まとめ>

今年度は、人権教育研究指定校事業2年目の取組であった。今まで取り組んできた人権教

育を全職員で見直し、共通理解を図りながら取り組んだ。子供の具体的な姿をとらえて当校の課題を再確認し、「違いを受け入れて、実践できる子供」を目指して、普段の授業を作り上げることの大切さをつかむことができた。一人一人が大切にされ、普段の授業の中で違いやよさを表出できる授業展開をしていくことこそ、「違いを受け入れて、実践できる子供」の育成につながると考えられる。

また、課題として、違いを受け入れる授業展開をより一層進めるためには、子供の言葉が現れる板書やネームプレートの活用等が挙がってきた。互いの意見や思いが視覚的に伝わるように板書やネームプレートの表示を工夫することを、今後の授業改善の視点とし、全職員で授業を見合うなどして取り組んでいきたい。また、視覚化には、タブレット端末等のＩＣＴの活用も有効であることから、様々な先進事例の情報収集を進め、実践につなげたい。